

研究課題	中華民国期に刊行された法書に関する研究 — 銭泳による漢碑の臨書を収録した法書を中心に —		
氏名	城間圭太	所属	芸術・スポーツ科学系
		職名	特任准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）			
『漢碑大観』は、中華民国期（20世紀初頭・正確な発行年不詳）に上海求古斎書帖局が出版した法書である。盧慧紋氏は「碑與帖の交會——銭泳『攀雲閣帖』在清代書史中的意義」において、『漢碑大観』が当時広く流通し、現在も台湾や中国、日本の図書館等に収蔵されていることを指摘している。 興味深いのは、同書が『漢碑大観』という名を冠していながら、実際には、漢碑ではなく、『攀雲閣臨漢碑』という清代に刊行された刻帖に所収の、銭泳による漢隸の臨書をほぼそのまま収録したものである。『攀雲閣臨漢碑』には、銭泳の臨書した漢碑・魏碑54種が収録されており、嘉慶23年（1818）に完成している。また、銭泳はそれに先立って『攀雲閣帖』という刻帖を乾隆54年（1789）に刊行しており、そこにも11種の漢碑の臨書が収録されている。 本研究では、銭泳の『攀雲閣帖』『攀雲閣臨漢碑』、そして民国期の『漢碑大観』について分析し、その概要を整理した。『攀雲閣帖』については東京学芸大学所蔵本、『攀雲閣臨漢碑』については『容庚藏帖』（広東人民出版社）所収本、『漢碑大観』については浙江大学図書館所蔵本を分析の対象とした。『攀雲閣帖』については、『叢帖目』（中華書局）に記載が見られるものの、これまでその詳細を論じた研究は見られなかったことから、まず『攀雲閣臨漢碑』との比較を通してその特質を明らかにした。興味深いのは、これら二つの帖においては、臨書される漢碑のみならず、臨書された箇所（文言）、そして原碑の欠損部分の書き表し方など、臨書の方法が大きく異なるという点である。銭泳の書法はもちろん、臨書に対する態度や観念にも変化が見られるといえる。また、それぞれの法帖の用途や想定する対象（刻帖を使用する者）も異なつたと考えられる。 また、『漢碑大観』については、『攀雲閣臨漢碑』からの改名及び清代の刻帖を法書として影印出版することにはいかなる意義があったのかを把握すべく、求古斎の出版理念、出版物の一覧が確認できる目録、当時の広告の内容等を分析した。 今後、今回の研究を元に明らかになった内容を二本の研究論文に分けてまとめたいと考えている。これらの研究を通して、清代や民国期における法書刊行の一端を明らかにしていきたい。			
【研究成果発表方法】			
発表論文名：「清代の書人による漢碑の臨書を収録した刻帖に関する研究—銭泳『攀雲閣帖』『攀雲閣臨漢碑』をめぐって—」、「『漢碑大観』にみる上海求古斎の法書刊行」 氏名：城間圭太 学会誌等名：『大学書道研究』へ投稿予定			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。